

宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第31話

偉人キュリー夫人とコペルニクス ポーランド

子供の頃に読みふけた偉人伝の物語の中で忘れられないのはキュリー夫人のラジウム発見の物語である。

1990年、日本の経済発展と生産性向上の実情を調査するため、ポーランドから「連帯」の次期議長ともくされるヤンコフスキーをリーダーとする幹部4名が来日した。日本生産性本部を訪れその対応を任された。打ち解けた懇談の席上ショパン、キュリー夫人など同国の偉人が話題となった。巨体のヤンコフスキー氏は生産性本部で編成したチームでぜひポーランドへ来てもらいたい、キュリー夫人の生家にも案内するといわれて、にわかにポーランドへの関心が増した。



日本生産性本部を訪れた連帯幹部
ポーランドの連帯本部

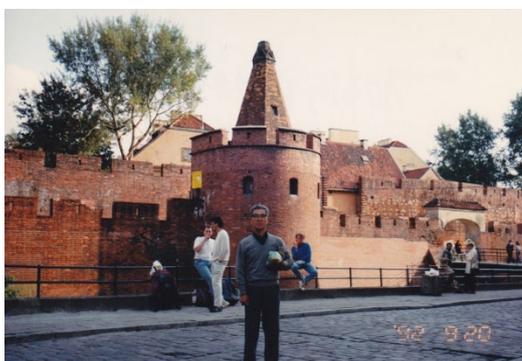
当時連帯を率いていた議長のワレサ氏は1990年ポーランド大統領に就任した。

ポーランドには、これまで産業視察と観光ツアーで3度訪れている。1992年、1993年は経済事情調査団のメンバーとしてワルシャワを中心に、2015年には観光目的でポーランドの各地を旅した。

ソ連が崩壊しソ連の衛星諸国の多くは自立の道を歩み始めていたが、1992年に初めて訪れたポーランドも共産主義から脱却し民主化への道を歩み始めたばかりである。連帯本部を訪れ講演をしたが、質疑では日本が至極当たり前と考えていたことが全く理解してもらえず体制の違いに面食らったものである。週末連帯のメンバーに案内されキュリー夫人の生家を訪れた。

ワルシャワ旧市街の市場広場は中世の面影を今に伝えている。そこからすぐ近くにレンガの美しい城壁が連なりバルバカンと称されて旧市街と新市街の境界となっている。バルバカンの城門からすぐにキュリー夫人の生家が今は博物館となってあった。5階建ての立派な邸宅である。

博物館にはキュリー夫妻が使った実験道具が沢山陳列されていて、さながら学校の理科の実験室のような印象であった。



ワルシャワのバルバカン



キュリー夫人の生家



夫妻の使用した実験用具

キュリー夫妻がラジウムを発見するなど、19世紀は基礎科学の目覚ましい発見が相次いだ。キュリー夫人の父親は貴族階級の科学者で母は教育者であった。1867年11月7日ポーランドの首都ワルシャワで5人兄弟の末っ子として生まれ、ポーランド語の名前は”マリア・サロメア・

スクウォドフスカといった。ポーランドで家庭教師をしながら科学の技能の勉強に熱心に取り組んだ。向学心に燃え1891年パリに行き、ソルボンヌ大学で物理学、化学さらに数学を学んだ。パリでは苦しい生活を強いられたが、奨学金を得ながら1893年物理学の学士資格を獲得し、さらに数学士の資格も取得した。知人の紹介で夫となるフランス人科学者ピエール・キュリーに出会い1895年に二人はめでたく結婚し、名前はフランス語で”マリ・キュリー”となった。

二人は共同して研究に没頭した。現在日常用語となっている「放射能」「放射性元素」はキュリー夫人の命名によるところである。夫妻は新元素ポロニウムを発見し、次いでラジウムと名付けた元素を発見する。

1903年パリ大学から理学博士の称号を受け、12月には夫妻はノーベル物理学賞を受賞した。キュリー夫人は女性として初めてノーベル賞を受賞する栄誉を得たのである。



生家にあるキュリー夫妻の写真

好事魔多しピエールが荷馬車に轢かれて亡くなるという不幸な事故に見舞われたが、夫人はピエールの跡を引き継ぎ、パリ大学初の女性教授となった。1911年には2度目となるノーベル化学賞を受賞する栄誉に輝いた。

時あたかも第1次世界大戦の最中である。キュリー夫人はレントゲンが発見したX線撮影を医療に活用し軍の負傷兵の治療に役立てた。

彼女は放射能研究を目的としたパリのラジウム研究所の運営に力を入れ、特に研究者の育成にあたり、大きな実績をあげている。その研究者の中にいた娘

のイレーヌは、夫と共に研究を重ね1935年ノーベル化学賞を受賞している。

このころから体の不調を訴えることが多くなった。そして長年放射能にさらされた結果、再生不良性貧血の診断がくだり1934年7月4日66歳で永眠した。

パリのパンテオンにはフランスの偉人が祀られているが、1995年キュリー夫妻はフランスに多大な功績を残したとしてパンテオンに祀られた。



ワルシャワにあるコペルニクス像

ポーランドの偉人はと問われて、とっさに名前が思い浮かぶのは楽聖ショパン、キュリー夫人、コペルニクス程度である。ワルシャワの市内を歩いていてショパンの心臓が収められている聖十字架教会からすぐの小さな広場に立派な銅像がある。地動説を唱え天文学に画期的な変化をもたらしたコペルニクスの像である。コペルニクスはそれまで地球中心の天動説が当たり前の考えを覆す、地動説をとらえた人物である。

ニコラウス・コペルニクス(1473年2月19日～1543年5月24日)

16世紀まで常識となっていた地球を中心とする天動説をコペルニクスは太陽を中心とした地動説を唱え、天文学研究に劇的な変化をもたらした。

コペルニクスはポーランドのトルンで生まれ、父親は銅を商う裕福な商人であったが彼が10歳の時に父と死別し、叔父に引き取られ英才教育を受ける。ポーランドのクラクフ大学で天文学などを学び、次いでイタリアのボローニャ大学やパドヴァ大学で医学・占星術を学び、フェラーラ大学ではカノン法（キリスト教会が定めた法）の博士号を取得するなど、天文学・化学・医学・占星術・法学など広範な知識を習得している。

コペルニクスはカトリック教の司祭であり医師として活動しながら、大学で知った天文学の研究を続けた。1533年には当時の教皇クレメンス七世の耳にもコペルニクスの地動説は届いていた。友人知人から彼の唱える地動説の学説を出版することを進められるがあまり積極的でなかった。

57歳の時ようやく「天体の回転について」と題した研究の成果をまとめドイツのニュールンベルクの印刷所に発注した。ところが脳卒中で倒れ半身不随となり校正刷りに目を通す間もなく70歳で没した。

コペルニクスのもう一つの業績は教会の財政を担っていた時に気づいた「悪貨は良貨を駆逐する」事象に気づいたことである。イギリスのトーマス・グレシャムはこれを理論づけ後に「グレシャムの法則」と称された。

余談ながらコペルニクスが死後どこに埋葬されたか不明であったが2005年彼の任地であったプロムヴォルグの教会の地下から遺骨が発見され、残っていた彼の毛髪を使ってDNAの鑑定をした結果本人の遺骨と認定された。



クラクフのヴァヴェル大聖堂

コペルニクスが学んだクラクフはワルシャワから300km、14世紀から17世紀に至る間ポーランドの首都であった。ポーランド各地は第2次世界大戦の戦禍で大きな被害を被ったがクラクフは戦火を逃れ中世の古都の趣を今に伝えている。市内には1364年創設コペルニクスも学んだポーランド最古のヤギエオ大学（現クラクフ大学）がある。

クラクフ市内の高台には、ヴァヴェル城があるがここにヴァヴェル大聖堂がある。カトリックの総本山ヴァチカンの教皇を務めたヨハネパウロ二世はこの大聖堂でクラクフ教区の司教を務めていた。